

## 荒木繁の古典教育論の考察

A Study of Araki Shigeru's Theory on Classic Education

中 嶋 真 弓

NAKASHIMA Mayumi

### 1. はじめに

1953(S28)年6月、荒木繁は、日本文学協会の大会で「民族教育としての古典教育—『万葉集』を中心として—」というテーマで実践報告をした。その報告は、当時の研究者や実践者に大きな影響を与え<sup>2</sup>、特に西尾実の「問題意識喚起の文学教育」の提唱につながった。西尾実は、この報告を受けて座談会の中で次のように述べている。

憶良のある歌が生徒の生活問題を喚起したということは、文学教育の新しい動きとして注目すべきであると思います。読者の生活問題意識を喚起するということは、たしかに文学機能の一つだと思います。今までの国語教育ではそれをまともに取上げなかった。文学作品の形象をどう受取るかということだけを考えて、問題意識を喚起するという機能を認めていなかった<sup>3</sup>。

西尾実は、「生徒の生活問題を喚起したということは、文学教育の新しい動きとして注目すべき」「今までの国語教育は（中略）問題意識を喚起するという機能を認めていなかった」と述べている。この文言からも、文学教育の方向性を見出したことが分かる。

これを受けて、田近洵一は、次のように記している。

その後、精力的に展開される西尾実の文学教育論は、ここに、その大筋が語りつくされていると言ってもよいであろう。そして、この西尾の問題意識喚起の提唱が、その後、国語教育界に広範な影響を及ぼすこととなったのである。（中略）西尾の主体的鑑賞理論は、荒木の報告を受けて、問題意識喚起の文学教育という実践理論として具体性を獲得していったのである<sup>4</sup>。

この実践報告は特に文学教育の観点から議論を巻き起こし、多くの批判もなされてきた。そ

れに対して、荒木は、1968(S43)年に「古典教育の課題—『民族教育としての古典教育』の再検討—」を発表し、当時の思いを述べ、さらにいくつかの批評に応えようとした。

そこで、本稿では、多くの研究者や実践者、そして、西尾実に影響を及ぼした荒木の「民族教育としての古典教育—『万葉集』を中心として—」(以下論考①と記す)の実践報告とその実践報告の内容をより確実にしたり補足したりするために書かれた「古典教育の課題—『民族教育としての古典教育』の再検討—」(以下論考②と記す)の二つの論考を中心に、荒木の古典教育における考え方や在り方を古典教材観・古典指導観の二観点から考察することを目的とする。これによって、荒木の古典教育論の一助となると考える。

なお、本文中の引用は、すべて新字体に換えたことと明らかな誤植は正して記したことを付記する。

## 2. 論考①・論考②に見る荒木繁の古典教育の構え

### 2-1 「民族教育としての古典教育—『万葉集』を中心として—」(論考①)の概要

論考①の実践報告は、高等学校二年生を対象に一週二時間行われていた「万葉・古今・新古今」の授業の中で、特に万葉集の授業について報告したものである。その授業形態について荒木は、「一人の生徒に三つか四つずつ歌を分担させて語釈、歌の意味を調べさせ、教壇に出てそれを説明させ、最後に感想なり批判をいわせ、それに対して皆から質問や意見をいわせるというやり方」(2頁)をしたと記している。

荒木は、冒頭で「私はここで文学教育における古典教育について、一般論的な理論をのべようとは思っていません」(1頁)と前置きした上で、その授業を行った関心と目的を3つ挙げている。それは以下のようなものである。

- (1)生徒は万葉・古今・新古今のうち、どの歌集に関心をもち、感動するだろうか。また万葉なら万葉のうち、どのような歌や歌人に興味をもつかを知りたい。
- (2)生徒が万葉集などのすぐれた歌を理解することができること。
- (3)それによって、日本民族がこのようすぐれた文学遺産をもっていることに、喜びと誇りを感じさせること。(1頁)

そして、3つの関心と目標を挙げた後、それぞれ(1)から(3)の事柄を具体的に説明している。そこで、特に、荒木の基本的な考えや指導といった教師側の視点から、内容を以下のようにまとめてみた。

#### ◇(1)について

- ・生徒がどのような感じ方・考え方をしているかを、できるだけ知ろうとする。
- ・教師の鑑賞や好みを押しつけるのではなく、生徒に先入観なしに作品に向かわせるように努める。

〔そのようにする意味〕

- ・生徒の実体から出発するために、できるだけ生徒のありのままの感じ方や考え方を把握する。生徒から生み出された問題から出発したいという考えからである。

◇(2)について

- ・すぐれた歌を理解できるようにするというのは、生徒に自ら味わい感動する力を与えるということ。
- ・正しい鑑賞の態度をつくる・・・(その方法として)生徒たちが歌を鑑賞する場合、自分の生活と結び付けて味わおうとするように仕向ける。

◇(3)について

- ・日本民族がこのようなすぐれた文学遺産をもっていることに喜びと誇りを感じさせるということは、生徒たちに祖国に対する愛情と民族的自覚をめざめさせるということになる。これが、古典教育の究極の目標である。
- ・生徒の関心から出発しなければならない。しかし、それは生徒の関心のおもむくままに引きずられることではない。生徒が失い忘れかけている貴重なものを思い起こさせる必要がある。

荒木は、このような考え方や方法によって、生徒に万葉集の授業を行ったのである。教師主導の訓詁注釈中心の授業ではなく、生徒が主体的に考え、問題意識をもち、それを解決していくところに、荒木実践の特徴があると言える。そして、授業の中で生徒たちが問題意識をもちその問題に対して議論する様子が記されている。

この実践報告に対して、その後多くの論議がなされ、問題点が指摘されたり批判されたりした。荒木は、それらに対して随所において意見を述べているが、1968(S43)年に論考②を発表し、当時の思いや批評に応えようとした。その中で、「私の実践報告に対しては、当時、西郷信綱、広末保両氏をはじめ、さまざまな人からさまざまな批評があった。」(66頁)と述べている。

そこで、次に「古典教育の課題—『民族教育としての古典教育』の再検討—」(論考②)の概要について見ていくこととする。

## 2-2 「古典教育の課題—『民族教育としての古典教育』の再検討—」(論考②)の概要

荒木は、論考②の冒頭で、次のように述べている。

私は文学教育についていくつかの論文を書いたが、古典教育についても民族教育についても、これをまともにテーマとして取り上げることなしに終わってしまった。これは私の怠慢もあるが、それだけではなく私が「民族教育としての古典教育」という課題を、その後の状況の変化に応じて発展させることができなかつたためである。(中略)「民族教育としての古典教育」の報告は、文学教育の方法についての活発な議論を呼びおこすきっかけ

となり、そこから問題意識喚起の文学教育論が生みだされた。それと同時に、私の提起した問題が、もっぱら方法論の側面で受けとられ、そこで主張された民族教育という目標の面が議論の過程で切り落とされていったことへの不満や批判も、たびたび耳にした。たしかに私の実践は多くの人によって、主として方法論の面で理論化され、実践化されていったということがある。その場合、その方法論はけっして技術的な意味のそれにとどまることなく、文学の本質的な機能と結びつけられて深められていったには相違ないが、「民族教育としての古典教育」の報告が持っていた方向性は、方向性として、深められていかなかったことは否定できない。これは、いったいどうしてだろうか。「民族教育としての古典教育」という目標は、日本が占領下にあったり、朝鮮戦争があったりした一九五〇年代初頭であってこそアクチュアリティがあったが、その後次第に効果性を失っていったからであろうか。結論から言えば、私は「民族教育としての古典教育」という目標は、現在もなお私たちの切実な課題としてであると信じている。問題は（中略）その後の変化する状況の複雑さの中で、この課題と正面からとりくむことの困難さに尻ごみし、よけて通ったことにある。（59頁-60頁）（下線は、筆者による。）

十数年の間、論考①を発展させてこなかったことについて記している。しかし、「結論から言えば、私は『民族教育としての古典教育』という目標は、現在もなお私たちの切実な課題としてであると信じている」と今なお自己の方向性や意図は変化していないというのである。そして、「一九五〇年代初頭」であるから実践報告が意味あるもので、今はそれを論ずる時代ではないということもまた違っていると言うのである。つまり、荒木の主張は、時代的な要因はあるにしろ、時代だけではすまされない、古典教育における確かな思い、強い考え方があり、それに立脚した、言い換えるならば荒木なりの古典教育の不易の部分だとは言えないだろうか。

続いて、荒木は、実践報告をした1952年に「民族教育としての古典教育」という目標をなぜ掲げたのかについて触れている。1952年当時の様子を回想した上で、次のように記している。

国民の多くは深い民族喪失感に陥っていた。民族的危機は政治的・社会的にあるだけでなく、私たちの心の中にあった。私は、生徒たちの目を、この民族の危機の現実に向けさせようと思った。そして、生徒たちの心を民族喪失感から回復し、植民地的現実とファシズムに対し抵抗する主体として育てていきたいと思った。だが、生徒たちが民族的ニヒリズムを克服し、真に抵抗主体として形成されていくためには、一方ではその心の支えとなる民族への愛情、民族の誇りを必要とするのではなかろうか。（中略）古典文学の教師としての私は、生徒たちの民族的自覚を呼びおこすためにいったい何が寄与できるのであろうか。（中略）植民地的現実の中で民族的ニヒリズムに陥り、受験体制の下でいじけてしまっている生徒たちの心を、日本文学の古典が感動をもってとらえ、彼らの心の中の人間らしく生きたいという願いを目ざめさすことができたなら、どんなにか意味のあることだろう、

そして生徒たちはそのような感動を与えてくれた古典に愛情と讃嘆の念を持つだろうし、さらにはそのような古典を生み出した民族に愛情と誇りを持つにちがいない。そして、そのような民族に対する愛情と誇りは、植民地的現実の中に立たされた生徒たちの抵抗主体の大切な部分になるだろう。(62頁-63頁)(下線は、筆者による。)

「民族喪失感」「民族的危機は心の中にある」「抵抗主体」という文言からも、強い危機意識や歪められた古典教育の在り方に対する強い批判を看取することができる。荒木の古典教育にはこの様な強い思いが込められているのである。その背景には当然のことながら当時の社会的・政治的な問題に対する荒木の強い批判があった。荒木の実践には、その中で生きる生徒たちを、何とかしなくてはならないという使命感のようなものさを感じる。

そして、荒木は当時の実践をより具体的に記したり、西郷信綱、広末保の批判に対する自己の考えを述べたりした上で、「現在の状況のもとで、私たちは『民族教育としての古典教育』をどのように具体化していったらよいのか。」(74頁)として、いくつかの問題に触れている。その内容は、以下のようなものである。

- ・第1・・・(政府や文部省が歪んだ民族主義に国民をひきこもうとしているからこそ)正しい民族意識のありかたを対置する必要がある。これを古典教育の分野で言えば(中略)それぞれの古典文学の意義を歴史社会的観点から科学的に明らかにし、古典の人民的伝統をとらえるとともに、古典をあくまでも文学として教えていくことが必要である。(74頁)(下線は、筆者による。)
- ・第2・・・鑑賞主体である生徒が自分と自分を取りまく現実に問題意識を持ち、真に現代を主体的に生きようとする中でこそ、古典は民族的で創造的な生命を開示する(74頁-75頁)

上記に記した内容の前後には、「文部省の教育政策の転換の背景には、防衛力強化という軍国主義復活路線が、教育の面に愛国心の鼓吹を要請する動きがあるのだということは、誰の目にも見やすい道理」(74頁)、「古典の重視が、古典を古典なるがゆえに権威化し、いわゆる民族的伝統とか『日本的なるもの』を精神主義的におしつける、あの戦前戦中の古典教育の復活になることを警戒しなければならない」(74頁)とある。荒木は、古典が本来の古典としての評価ではなく、戦前・戦中のように国粹主義高揚のために利用される、そして戦後初期に古典が軍国主義の象徴でもあったかのごとく言われ、その結果「古典からの解放」とばかりに教科書の採録が激減した、そのように政治的・社会的に翻弄される古典教育の在り方を批判しているのである。荒木は、古典が政治・社会の道具として担った歪んだイメージを払拭し、古典が何も背負わされていない古典作品を文学として指導する。そして、その指導の在り方、方向として生徒たち主体の教育を構築しようと考えたのである。生徒たちに問題意識をもたせ、考えさ

せる教育こそ重要であり、それを行うことがひいては古典教育のあるべき姿だと考えていたのである。このような思いにさせたのは繰り返すが、政治的・社会的によるものが大きい、荒木が主張する生徒たち主体の教育は、それが成立する指導を確実に行き生徒たちに力を付けるならば、それはその時代を生きる人間だけでなく、教育の普遍性につながるとは言えないだろうか。

以上、荒木が特に古典教育について記した二つ論考の概要を見てきたのであるが、論考①の中で、中学校時代の古典の授業を取り上げ「なぜそれら(古典教材を指す。ただし、ここには具体的な作品名は挙げられていない・・筆者補)が学ぶに値するすぐれた作品なのかということは全く説明されずに、解釈や文法をおしこまれた(中略)そこには、一方的に教えこむ立場と、一方的に教えこまれる立場はありましたが、生徒の意見とか感じ方は全く問題にされなかったのです。」(198頁)と述べている。ここに荒木の古典教育の原点を見ることができると考える。荒木は、中学校時代「①今教師から与えられ学んでいるものがなぜすぐれた古典作品なのか」「②なぜ我々生徒の意見とか感じ方を問題にしないのか」という疑問をもちながら授業に向かっていったと思われる。それが荒木の古典における根底にあり、国語教師として古典を教える立場になった時、実際の教育現場で自分が疑問に思っていたことに自ら教育者として応えようとしたのではないかと思われる。そして、それらの思いは、時代によって翻弄される古典の在り方に対する批判によってより強められ、「①今教師から与えられ学んでいるものがなぜすぐれた古典作品なのか」は、「古典教材観」につながり、「②なぜ我々生徒の意見とか感じ方を問題にしないのか」は、荒木の指導の在り方、つまり生徒の考えから授業を構築していくという「古典指導観」につながったものと思われる。

では、荒木の「古典教材観」「古典指導観」がどのようなものであったろうかを次に見ていくことにする。

### 3 荒木繁の古典教材観・古典指導観

#### 3-1 荒木繁の古典教材観

荒木が、論考①・②の中で古典教材について述べている文言を、以下のようにまとめてみた。

- ・万葉や古今ばかりでなく、平家でも、徒然でも、芭蕉でも、近松でも、それらがみなすぐれているという前提のもとでなく、それが生徒たちにどのように受けとられるかから出発する。(論考①2頁)
- ・すぐれた歌というものの、なにかすぐれているかが問題・・・作品評価の基準の問題(論考①3頁)
- ・(近代短歌を例にとると)左千夫の方が牧水よりいいのだというような教え方をすることは、たとえ万一それが正しいにせよ問題である。(論考①3頁)
- ・国語の教師は、古典に対するできるだけ正しい評価をもち、どのような古典を生徒に与えるべきかについても考慮して、民族の遺産として真にすぐれた作品を教材として用

いなければならない。(論考①7頁)

- ・万葉の授業のはじめに、中国の「引力」という小説の話をした。(論考①9頁)
- ・万葉の授業の中では、あくまで万葉の文学としての豊かさとすばらしさを生徒にわかしてもらいたいと願った。(論考②63頁)
- ・万葉は戦後の民族的荒廃の中にある生徒たちの心をもより動かす力があるはずだと信じていた。(論考②63頁)
- ・万葉集がすぐれた文学だから(論考②65頁)

荒木は、古典教材について「すぐれている」という文言を使っている。「作品評価の基準が問題」「すぐれた作品を教材として用いなければならない」と記しているが、「すぐれた」が何を指し、具体的にはどのような作品がそれに当たるのかは記していない。「平家・徒然・芭蕉・近松」、「万葉集」は登場するが、なぜそれらをすぐれた作品とするのかは記していない。しかし、荒木が「平家等」を挙げているということは、言い換えれば一般的に日本人が学ぶべき古典と言われている作品を「すぐれた作品」としているとも言えるのではないだろうか。また、論考①の実践報告から考えると、「生徒がその中から問題を発見することができる作品」「生徒が感動できる作品」「生徒の鑑賞に耐えうる作品」が「すぐれた作品」と言えるのではないだろうか。それは、前述した論考②「植民地的現実の中で民族的ニヒリズムに陥り、受験体制の下でいじけてしまっている生徒たちの心を、日本文学の古典が感動をもってとらえ」からも分かる。荒木は、「古典が生徒たちの心を捉える」とするのである。生徒たちが古典に求めるのではなく、古典としての価値が備わっている作品があり、その作品を生徒たちに考えさせることが必要だというのである。繰り返すが、荒木はこのような古典作品を素材として授業を構想すれば、古典の究極的な目標とした「生徒たちに祖国に対する愛情と民族的自覚をめざめさせる」に迫ることができると考えたのではないだろうか。荒木にとって「すぐれた古典」とは、古典として生徒たちに語りかけ失ったもの忘れてきたものを発見させる作品」であり、それを見抜く力が教師に求められているというのである。そして、その作品の一つが荒木にとって「万葉集」であったのである。前述したように荒木は、「万葉の授業の中では、あくまで万葉の文学としての豊かさとすばらしさを生徒にわかしてもらいたいと願った。」「万葉は戦後の民族的荒廃の中にある生徒たちの心をもより動かす力があるはずだと信じていた。」としている。しかし、一方で、「かれらはなぜ万葉集からそのような強い感動を受けとったのか。もちろん、万葉集がすぐれた文学だからということはあるが、それだけではないように思う。そこには、鑑賞の対象となる文学作品の問題と同時に、鑑賞主体にかかわる問題が大きく介在していたと思う。すなわち、生徒たちが己れと己れをとりまく現実に問題意識を持ったとき（中略）そのような主体の姿勢が、古典としての万葉の文学的ないのちを発見させたと言することができる。」(論考②65頁)ともしている。つまり、「生徒たちの心を捉える」すぐれた古典作品を教師が見極め、「生徒たちの生活の現実に対する認識をふかめ、それに対する批判の観点をするどくしていくことと結びつけて」(論考②65頁)鑑賞力の指導を行うことこそが、古典教育では

大切であり、このような学習が「祖国に対する愛情と民族的自覚を目ざめさせる」ことにつながる」と述べていると考える。

### 3-2 荒木繁の古典指導観

荒木は、論考①・②の中で、指導の在り方について記している。それを、以下のようにまとめてみた。

- a 鑑賞上のおしつけはしない。(論考①1頁)
- b 先入観なしに作品にむかわせるように努める。生徒の実体から出発する。(論考①1頁)
- c 生徒の感じ方や意見がまちがっている場合でも、教師はそれからなにかを学ぶにちがいない。・・・そこのところを問題にしないならば、国民を基盤にした遺産の継承は正しく行われぬ。(論考①2頁)
- d 教えこむのではなく生徒が自ら感じいいと思うのならそれに任せるべき。(論考①3頁)
- e 生徒の関心のおもむくままに引きずられるのではなく、生徒が失い忘れていている貴重なものを思いおこさせる必要がある。(論考①9頁)
- f 正しい鑑賞の態度・・・鑑賞する場合、自分の生活と結びつけて味わおうとするように仕向ける。(論考①4頁)
- g 方法としては、教えるというよりは、生徒が自分の力で文学のすばらしさを発見できるように指導するということ(論考②61頁)
- h 生徒の鑑賞力の指導というものは、単にそれだけきりはなして作品の鑑賞をしていけばよいというものではなく、生徒たちの生活の現実に対する認識をふかめ、それに対する批判の観点をすどくしていくことと結びつかなければならない。(中略)万葉集を主体的に鑑賞する基礎としての人間主体にはたらきかけていることになる。(論考②65頁-66頁)
- i かたわらに立って、解釈や文法についてあやふやなところがあれば問いただし、誤りがあれば指摘する。(論考①2頁)
- j 討論会の開催(論考①2頁)
- k 生徒の実感をいわせる。(論考①2頁)
- l 考えを作文に書かせる。(論考①3頁)
- m 国語の時間をさいて、民族の誇りと民族的自覚といったことに触れた。「最後の授業」や「引力」の話をして、問題を投げ掛け感想文を書かせた。・・・自分たちのおかれた状況と自分たちの主体のありかたを直視させる役割を果たした。(論考②64頁)
- n 西郷信綱の一面化して教えているという批判に対しての返答として、一面的ではなく相反する歌も提示したと述べている。(詳細は割愛する・・・筆者補) (論考②66頁-67頁参照) (なお、a~nは、筆者が付記したもの。)

上記の「古典指導観」は、大きく二つに分類することができる。a~hは、荒木の古典教育



の指導に向かう考え方や姿勢で、i~nは、古典の授業における具体的な指導である。

荒木は、a~hからも分かるように、「生徒たちの感じ方」を大切にするために生徒から出発する古典教育を実現しようとしたのである。そして、生徒たちが自分の考えをもつことができるようにするために、「教師の考えを押しつけない」「生活と結びつけるように仕向け」たのである。荒木は、古典に現代的意義を求め、古典教材を感化主義の材料としてではなく、生徒の主体的な読みを導き考えさせ、生き方につながるための素材として位置付けている。さらに、その素材を生徒自らが考えそこに新たな発見(ないもの)や失われたものを見出していく授業の在り方を提唱したのである。古典教材を自己との生活に結び付けて考え読んでいく主体的な読み<sup>7</sup>、そこにこそ古典教育の意義があり、そうすることが「生徒たちに祖国に対する愛情と民族的自覚をめざめさせる」という古典教育の究極の目標につながるとしていると言える。そして、そのような授業を支えるため、正しい鑑賞の態度を育てる必要があった、その具体的指導がi~nに見られ、生徒の考えや解釈の誤りを正したりしたのである。生徒の主体的な感じ方や考え方を大事にしなが、基本的な文法や解釈においては指導したというのである<sup>8</sup>。生徒たちの主体的な読みを成立させるべき取り組まれた実践ではあったが、荒木は素材としての「万葉集」の価値を見極めた上で授業がなされていたものと思われる。これは、前述した「国語の教師は、古典に対するできるだけ正しい評価をもち、どのような古典を生徒に与えるべきかについても考慮して、民族の遺産として真にすぐれた作品を教材として用いなければならない。」という教師としての基本的な姿勢が根底にあり、そのような古典教材観に立脚した古典教育の指導がなされていたと考えられるからだ。

荒木は、生徒の主体的な読みこそが大切であり、それにふさわしい作品を生徒たちに提示していく必要があるとするのである<sup>9</sup>。そして、この考え方は、時代に左右されることのない古典教育の方向とも言えるのである。

#### 4. おわりに

荒木は、論考①の中で、次のように述べている。

植民地化の危機にあり、青少年の頽廢化が問題となっている現在において、教師は生徒をどのような人間像に向かって教育してゆくかについてはっきりした目的意識をもつべきです。(9頁)

また、終末で、自分の論が、古典の無批判的尊重・歴史地理教育の復活と結び付くのではないかという危惧をもち、次のようにも述べている。

私が古典教育の意義を力説することは、すぐれた古典を正しく教えよ(中略)逆コースの風潮とは勿論たたかってゆかねばなりません、それは逆コースをおそれて民族的契機

を国語教育から失いコスモポリタニズムに墮することによってではなく、国語教育の上に正しく民族の観点をすえることによってのみ可能であろうと思います。(10頁)

荒木は、時代の中で古典教育がどのようにあるべきか、古典文学の教師として目の前の生徒たちに何をすればよいのかを試行錯誤した。そして、一つの指導の方向として、論考①に報告された実践を行ったのであろう。荒木は古典教育の究極の目標は「生徒たちに祖国に対する愛情と民族的自覚をめざめさせるということ」とする。そして、「本当の愛国心は、祖国の歴史をよく理解し、民族のもっている優れた伝統と文化をよく知るところに生まれる」(論考①7頁)と述べている。つまり、古典教育で「祖国に対する愛情と民族的自覚」を目覚めさせるためには、過去のことをよく理解し、日本人がもっている優れた伝統と文化を知ることが重要であり、その実現に向けて大切なことが「生徒自ら感じ考えることであり」、そのようにするために、「生徒の生活と結び付けるように仕向ける」授業を構築したのである。

そして、論考①ではほとんど説明されなかった「民族」について、論考②で次のように記している。

今日、この「祖国に対する愛情と民族的自覚」ということばを聞いて、奇矯に思ったり違和感を感じる人が少なくないだろうと思う。(中略)「民族」とか「民族教育」とかいうことばが狭く感じられるなら、「国民」とか「国民教育」というように言いなおしてもさしつかえない(中略)「民族」ということばが「民族主義」となり、「戦時中の天皇を中心とした排外的な民族主義を思い出す」というふうに行く反応のありようの中に、「民族」というシンボルが支配者から私たち国民の手に奪いかえされていないという現実を見るといっては言いすぎだろうか。(61頁-62頁)

荒木の中に、すぐれたよい古典を生徒に与え、自らそれを読む力を付けていけば自己の生活と結び付け自分たちで問題を発見し、考えていく。そのためにも、古典教材は「すぐれた作品」を与える必要があり、読む力を付ける必要があったのである。それがひいては、「民族」という意識をもたせることであったからである。生徒たちの主体性を生かすために、荒木実践は一見教師が傍観者的な役割に見えるが、実は、綿密な教材研究がなされていたのではないかと考えられる。そして、民族的な意識をもたせるためには荒木にとってその指導の在り方は必須のことでありそうする必然があったのである<sup>10</sup>。

荒木は、「古典」がそうであったように、戦前・戦中に植え付けられた「民族」ということばに担わされたイメージではなく、本来の意味における「民族」としてどうあるべきかを生徒たちに考えさせ、日本という自分たちの国を愛する心を育てようとしたと考えられる。

今後、さらに荒木の「民族」における考え方、当時の文学教育あるいは日本文学協会との関わり等についても検討していく必要があると考えている。

<sup>1</sup> : 荒木繁「民族教育としての古典教育—『万葉集』を中心として—」(日本文学協会編集『日本文学』1953.11) ・ ・ 実際の報告は6月になされ、11月に『日本文学』に載った。そして、実際の報告を受けて座談会がなされた様子が注3に載っている。(筆者補)

<sup>2</sup> : 荒木繁の実践報告について田近洵一、浜本純逸、高橋和夫、内藤一志は、それぞれ次のように記している。高橋和夫と内藤一志は、日本文学協会(日文協)との関わりについて触れ、荒木繁の実践報告の背景に日本文学協会の古典研究の歩みがあるとしている。

・ 田近洵一『戦後国語教育問題史 増補版』大修館書店 1991 87頁

当時、古典の授業というと教師中心の語句の注釈と作品の読解・鑑賞および文学史的解説で終わるのが普通であった。現実との対決を求めながら、実際にはそのための有力な方法を持たなかった当時の国語教育現場にとって、生徒の切実な問題意識とのかかわりで作品を読むという荒木の実践は、まさに画期的なものであったと言ってよいであろう。

・ 浜本純逸『国語科教育総論』溪水社 2011

講和条約締結後の民族意識の高揚期にあって、「民族意識を高める」という「生き方」と関わる教育の実践として、参会者の心を打つものがあった。荒木実践は、戦後中等学校国語教育史の大きな「事件」であった。(30頁)

・ 高橋和夫「国語教育基礎講座18 戦後国語教育史(六)」(『教育科学・国語教育18』明治図書 1960)

この報告は、どういう状況をふまえて生まれてきたものだろうか。究極の動因としては、(中略)戦後社会の転回期という社会的要因に置くことができるが、ここには民族の危機という当時支配的な意識を鋭く主体的に受けとめた荒木氏の肖像を見ることができる。(121頁)

この荒木報告は、決して単独に出現したものではない。それは日本文学協会の成立以来の積み重ねの中から生まれてきたものである。四六年、協会は戦時中以前の支配階級御用の旧国文学より脱皮することを目ざして誕生した。(122頁)

・ 内藤一志「戦後古典教育史のために—日本文学協会の活動を対象にして(1) 荒木繁『民族教育としての古典教育』成立の背景としての古典研究—」(北海道教育大学語学文学会『語学文学通巻第29号』1991)

荒木氏の実践は、当時の国民文学論を背景としていることは確かである。しかし、国民文学論の一語で括るのではなく、むしろ日文協の古典研究の進展の中で獲得していった視点が直接的に反映しているとらえた方がより内実に触れたものと思われる。(105頁)

<sup>3</sup> : 「座談会 文学教育をめぐる—その課題と方法—」(日本文学協会『日本文学』1953.9) 9頁

<sup>4</sup> : 注2(田近洵一)に同じ 81頁-82頁

<sup>5</sup>：荒木繁「古典教育の課題—『民族教育としての古典教育』の再検討—」(日本文学協会編集『日本文学』1968.12)

<sup>6</sup>：榎井英人(『「国語力」観の変遷—戦後国語教育を通して—』溪水社 2006)は、この部分を捉えて次のように記している。

当人の感じ方や考え方をまったく問題にしないやり方は、ひととひとのあいだに横たわる断層を当然のこととして無視する態度だからである。そして、われわれがわれわれ自身の問題に近づくことを妨げようとするものだからである。つきつめると、それはじぶんがじぶんであることと相容れない。(175頁)

榎井は、同書において、荒木の実践報告を次のように記している。ここに付記しておく。

民族という、現在では誤解を招きやすいことばによって求められようとしていることは、自発的な連帯の力、といていい。このとき、文学の役割は他者間の断層を破壊することである。文学の力は、そこに表現されていることはまったくじぶんたちのことだと思わせる力でなくてはならない。たとえそれが古典のような時間的へだたりをもつものであっても、かえってその距離のゆえに、人々は純粹につながるることができる。すぐれた文学が喚起し集約する問題意識は、ひとりひとりの感じ方考え方を消化してふくらんでいこう。荒木の実践に人々は、他者間の断層だけでなく、自己内の断層をも破壊する文学の力を見ようとしたのではないだろうか。(178頁)

<sup>7</sup>：田近洵一・井上尚美『国語教育指導用語事典』(教育出版 1984)には、次のようにある。

この実践(荒木繁の実践・筆者補)をふまえて、西尾実は「問題意識喚起の文学教育」を提唱した。これによって、作品中心の〈読み〉から〈読み手〉主体の〈読み〉への転換が図られ、やがてそれは「読者論」へとつながっていく。(215頁)

<sup>8</sup>：注2の中で、田近洵一は、荒木繁の考え方の問題点を次のように記している。

新しい方向の実践は、厳密に検討すべき問題点も多く含んでいた。特に、生徒の生活と結びつけて鑑賞するということは読み手の側から見るとならきわめてアクチュアリティの高い行為だとは言え、それではたして作品が読めているのかどうか、荒木の言うように「万葉集を全人間的にうけとめている」ということになるのかどうか問題になるのは当然であった。(中略)生活と結びつけさえすれば「全人間的な」読みが成立したとは単純に言えないのであって、そこに、対象としての文学とその読みのあり方が問題になってくる。(82頁)

<sup>9</sup>：渡辺春美『戦後古典教育論の研究—時枝誠記・荒木繁・益田勝実三氏を中心に—』(溪水社 2004)に荒木繁の古典教育の方法として次のように記している。

荒木繁氏の考える古典教育の方法の基本的原理は、鑑賞主体が問題意識を持ち、文学(古典文学)作品に立ち向かうことによって、文学(古典文学)作品のいのは発見されるとするところに見いだされる。基本的原理に立った古典教育の方法について

は、次のようにとらえることができる。ア.上からの民族主義に対し、正しい民族意識を対置することが必要であるとする考えに立ち、イ.古典文学の意義を歴史社会的観点から科学的に明らかにし、古典の人民的伝統をとらえ、ウ.鑑賞主体である生徒の問題意識を軸に、古典をあくまで文学として教えることをとおして、古典の民族的で創造的ないのちを発見させ、エ.「正しい民族意識」を育てようとするものである。(335頁-336頁)

さらに渡辺春美は、荒木繁の古典教育論の意義を次のように整理している。ここに付記する。(356頁-357頁)

- ①生徒の実体から出発し、生徒の実体に応える古典教育を主張した。
- ②問題意識を持ち古典に立ち向かうことにより、古典の命は発見されるとする、古典教育の理論的構造を見いだした。そこには、文学経験における問題意識の機能が理解されている。
- ③問題意識を古典の指導過程に位置付けた。
- ④古典教育を文学教育として、文学経験の成立に基づく、生徒の認識的価値的変革を求めた。
- ⑤文学(古典文学)鑑賞、文学経験の成立において生徒の主体性を尊重した。

<sup>10</sup>：注3の「座談会」の中で、荒木は、次のように述べている。

今までの古典教育は、その作品が本当の意味で、どのように文学的に勝れているかということを生徒に理解させるというよりは、初めからいい作品であるときめこんで、生徒達に、上からおしつけて行った。しかし、日本の民族の文化遺産が、本当に生徒たちのものになるためには、生徒達に勝れたものとして感動をもって受取られる必要があります。僕の場合はできるだけ教師がこれは勝れているのだということ教えるのではなくて、生徒達が自分でどう受取るだろうかということの問題にしたわけです。そして、その結果、いろんな生徒達の感じ方が出て来ているわけですが、その場合になんでも生徒たちが自分で感じさえすればいいというのではなく、やはり正しい鑑賞の仕方をする必要がある、その方法としてできるだけ生徒達が自分達の生活と結びつけて作品を鑑賞しようとする態度を養なわせようとしたのです。その結果生徒達は、万葉集の持っている、大らかな、健康な情熱を感じとった。それは現代の社会においては失われているものですが、生徒たちはそういう自分達にないものを万葉の中に見出して感動しているわけです。(2頁)